

博物館や自然をもっと身近に！ ～11コースのミニ観察会「学芸員とおさんぽ」

いしはまさ えこ
石浜佐栄子(学芸員)

「博物館や、館周辺の地元入生田の自然を、もっと身近に感じてもらいたい、もっと気軽に楽しんでもらいたい」そんな思いから企画が生まれ、実行されたイベントがあります。開館記念日事業「ミュージズ・フェスタ2008」の一環として、2008年3月に実施されたミニ観察会「学芸員とおさんぽ」です。

もっと気軽に、もっと身近に

当館では年間を通してさまざまな講座等を実施していますが、その多くは午前午後を通して参加するもので、事前の申し込みが必要です。じっくりと時間をかけて観察したり考えたりするため、質が高く充実した講座なのですが、その一方で気軽には参加しにくいという面もあります。気軽に当日申し込んで短時間で参加でき、子どもでも楽しめる“講座体験会”のような催し物をやってみてはどうだろうかという話が持ち上がりました。

そこで、博物館周辺の自然や博物館の裏側（バックヤード）を学芸員が案内するミニ観察会を、家族連れなどで賑わうイベント「ミュージズ・フェスタ2008」の一環として企画することになりました。博物館の講座はちょっと敷居が高いという方にも気軽に参加していただき、博物館や学芸員、また地元入生田の自然をより身近に感じてもらうことが目標です。

案内する学芸員と参加者が十分に交流できるよう、1つのコースの定員は10名という少人数に。その代わりコースはたくさん用意しようということで、野外8コース（動物、もぐら、鳥、虫、花、きのこ、石ころ、火山）、博物館内3コース（化石、魚、ミステリー）の計11コースを実施することになりました。イベント名は、子どもにもやさしく気軽な感じで「学芸員とおさんぽ ～体験！身近な自然と博物館～」に決定。親しみやすいコース名を考えたり、コースを選ぶきっかけにしよう Yes / No チャートを盛り込んだチラシを作るなど、楽しく興味を持ってもらえるような広報の工夫もしました。

当館でこれほど多くの観察会を同時に行うのは、はじめてのことです。おそらく他の博物館でも、あまり例がないのではないかと思います。少人数とはいえ、参



図1 ミニ観察会「学芸員とおさんぽ」の様子。a: もぐら塚の観察（もぐらコース）。b: 博物館の大収蔵庫を見学（化石コース）。c: コマダラウスバカゲロウの幼虫をさがす（虫コース）。d: 「ハムシを食べるコマダラウスバカゲロウの幼虫」虫コースから携帯メールを使って報告された画像。

加者の安全などを考えると、学芸員が1人だけで案内するというわけにはいきません。そのため、学芸員以外の館職員や博物館友の会の有志の方々にも観察会への協力をお願いすることにしました。つまり参加者は、学芸員だけでなく、学芸員以外の館職員や友の会の方とも、顔の見える交流ができるというわけです。

そして当日…

前例のないことだけに、準備を進めながら頭を悩ませたことがありました。それは、参加は気軽というモットーのもと、事前申し込み制ではなく当日受付のみとしたため、参加者数や参加者層の見当が全くつかなかったことです。参加者が集まらなかったらどうしよう…という心配もあったのですが、実際当日になると、受付開始時間（観察会開始の3時間前）には人があふれ返り、希望者多数のため抽選で参加者を決めるコースも出てしまうという結果となりました。参加者層は、主に家族連れや友達同士の子どもたちなど。朝から来館して「ミュージズ・フェスタ」の他の催し物にも参加するなど、博物館を丸一日満喫された方も多かったようです。各コースとも盛況で、学芸員と一緒にさまざまな発見や交流をし、無事終了することができました(図1)。

もう一つ、今回は初めての試みとして実施したのが、観察会の実況中継です。各コースで発見したものを携帯電話で撮影(図1d)して携帯メールで送信、受信した画像を博物館のミュージアム・シアターで紹介しました。館内で石や磁石の実験を行った「ミステリーコース」に関しては、ウェブカメラを利用して実験の様子をリアルタイム映像で紹介。博物館にいながらにして、11コースの観察会の様子を同時に楽しむことができました。世の中に携帯電話が普及し、情報の通信速度も早くなってきているので、通信機器をうまく利用すると観察会の新たな可能性が広がるかもしれませんね。

最後に全コースの参加者が集合して、各コースで発見してきたことを報告。終了後には、今後の講座にも参加してもらおうと、博物館の催し物案内などをおみやげとして配布しました。今回のイベントには、普段あまり館の講座には参加していないような方にもたくさん参加していただき、“もっと気軽に、身近に”という思いが多少なりとも届いたのかなと感じています。これを機に、博物館や学芸員、身の回りの自然をより身近に感じて、講座に参加したり、博物館を何度も訪れるなど、博物館に親しむ「リピーター」が増えてくれることを願っています。